



韓国の仮面劇で使われる

ムンドゥンイ(문둥이)

(ハンセン病患者)

「天刑病」という苦難を越えて

野林格蔵物語

野林格蔵は嘉永6年に生まれた。剛腹であり大変な大酒飲みであったが米、綿を作り、両親によく仕えていた。ところが明治12年ごろより、ハンセン病の兆候があらわれた。家族は財産を傾け、治療に八方手を尽くし、神仏に祈願もした。

しかし、全く何の効験もなかった。格蔵の妻は夫の病気を忌み嫌い、息子を残して実家へ逃げ去った。

そんな折、丹波教会の父と慕われた村上太五平が格蔵の村に伝道に訪れた。格蔵は初めて聖書のお話を聞き、神の愛を信じるようになった。そして明治17年、格蔵を含めた30人がゴルドン宣教師から洗礼を受けたのであった。

しかし、信仰の道は平坦ではなかった。仏教寺院の住職たちが、キリスト教信仰が広がるのを恐れ、村人を扇動して迫害を企て、キリスト信徒たちは親戚や友人から絶交を迫られた。また教会堂が何者かによって焼き打ちされたばかりか、格蔵の家も放火された。

ところが、迫害を受けたことでかえって信徒たちの信仰は清められ、放火犯を警察に告訴せず、迫害者たちのために、会堂の焼け跡にひれ伏して愛敵の祈禱会を開くほどに信仰の炎は燃え上がったのである。

一方、病状は悪化の一途をたどり、明治22年、格蔵は完全に失明するにいたった。両親とは死別、一人息子は奉公に出、妻には見捨てられ、一人で暮らすほかはなかった。しかし、慰めに訪れる人々は、かえって、格蔵の厚い信仰と喜びを見て励まされた。格蔵は知る限りのすべての人のために祈り、神の御国の完成のために祈った。祈りを神より託された使命と信じたのである。

明治24年には二度にわたって毒殺されそうになった。九死に一生を得たものの、もはやその姿は、旧約聖書に登場するヨブさながら、正視に耐えられないものであった。しかし、肉体はボロ雑巾のようになりながらも、霊は天国の光を湛え、見舞に来た牧師を奮い立たせるほど力に満ちていた。それはアブラハムのふところに送られた乞食ラザロのようであったかもしれない。

同年9月、ついに格蔵のたましいは天に召された。わずか40年の生涯であった。しかし、今もその輝ける信仰は私たちに励ましてやまない。

記

1. 日時:2017年4月14日(金) 10:30 AMより
2. 場所:ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師:尾崎富雄(ゴスペルホール代表)

入場無料。

どなたでも参加できます。